

●高澤良一 第六句集 燕音

●十月―十二月

今年また生るだけの柿生りにけり

神品の桂黄葉とうち仰ぎ

二大樹の銀杏黄葉の消耗戦

喧し屋鴟が四の五の云うてをり

綺麗事どれもつまらぬ衣被

鼻風邪を追出す手だてなかりけり

平日の鴟聞きながら稿急ぐ

桜もみぢどつちつかずの色合にて

乱入の鴟の雄叫びとも聞え

郷土色豊かな柿が出回れり

独善は他にも及ぶ氷頭膾

鴟は聞き入れぬ入れぬの一点張り

枳殻に鴟の手仕事鴟の贄

遠からず蛤となる雀これ

香ばしき焼栗御説ごもつとも

綱引のづるづる旗色悪くなる

先代は大の庭好き万年青の実

人物評ざつくばらんに梨の味

沢蟹宇津谷の歩むその先靴で堰き

宇津谷の葛も了りの峠道

宇津谷の葎叩きの雨上る

だんだんと見えてくるなり棚の郁子

茲宇津山 慶龍寺に許六秋風の吟遣しけり

十団子の碑いしづみ秋の風招よべり

青柿の尻辺に廻る雨滴かな

旅先の雨脚見つゝとろろ汁  
彼岸花一本咲きぬ宿外れしゆく  
沢蟹のふもと宇津谷地藏盆  
花すすき人家といふは寄り添うて  
鶏頭の暮るる暮るといへば暮れ  
天帝の如雨露秋霖とぞ云うて  
大寺の二間打ち抜き観月会吐月峯  
薩摩琵琶待月軒に徹りけり  
重衡を弾ず無月の薩摩琵琶  
天柱山闇夜転じて望の月  
蜻蛉の訝しげなる眼に遭ひぬ  
蜻蛉の極めて人間臭き季とき  
隠坊の如きとんぼが前から来る  
穂芒のまさに段平抜かんとす油山  
この辺り倒れながらも泡立草  
鉄漿蜻蛉の影おはぐるを追ひゆきぬおはぐる  
考えの閃く如くおはぐる現る  
糸揺すりやればどう出る女郎蜘蛛  
霍乱を起して倒る稲あらん  
民宿の茶請けの栗の渋皮煮平野  
里人の里芋作りこの家も  
洗ひ場の底にうごめく大蚯蚓  
秋燕を見たりのこゑに振り返る  
落栗の真新しきはこれとこれ  
茶畑のその畝々の朝の虫  
罔鮎漁期も了り近くなり  
くわりんの実なりし秋光集むるは

川波の緩急つけて芒過ぐ

十六夜の小腹に納む里の栗

十六夜の宿の枕を均しけり

十六夜の宿の障子を走らす

里芋の茎の色よき十六夜

鶏頭の小火出す火の見櫓下

山峡の百千の蟲夜を徹し

芒とる少年月を迎ふ村

川上も又川下も花芒

節々に臙脂の入る川芒

利口者猪にまたやられけり

金目漁漁師曰くさうさな八丈島辺りまで

江ノ電長谷 御霊神社（鎌倉権五郎神社）の面掛行列をよぎり出発面掛衆

\*面掛行列は「仮面風流」を今に伝える文化遺産鎌倉権五郎景政の命日に当たる例大祭は神輿渡御に面掛衆が行列するので知られる

面掛行列ひようと「天狗」の先祓い

\*面に十面あり「爺」「鬼」「異形」「鼻長」「烏天狗」「翁」「火吹男」「福祿」「阿亀」「女」なり

神輿渡御おわたりを待つ間「鼻長」一服す

「鼻長」外国人見物すをわし鼻が見る面掛祭

面掛の「天狗」の高下駄のっしのし

「女」とりあげが孕み「阿亀」おかめに団扇風

\*はらみつとは面掛衆のうち、おかめは妊婦の風態に仮装し、大きな腹を抱えながら歩行する。それゆえ、この行列を「はらみつ」と称したこともある。田楽によく出るはらみ女の流系と見たのであるが、里伝によると、源頼朝が甘縄の非人の娘を懐胎させたので、年に一度、彼らに無礼講の機会を与えた、その名残といい、近年まで「非人面行列」とも呼んでいた

鎌倉に裏面史ありぬはらみつと

先祓い「天狗」ぐらつくこと幾たび

をさな子の鎌倉囃子に乗り「翁」

面掛けの一戸一役里祭

玉すだれなかなか夏が逝かぬなり

腕組みしてさてどう詠まん弁慶草

山茶花に毛虫一騒動ありぬ

灸花いつまで続くこんなこと

雄日芝のすれっからしのその穂先

腕光則寺 日朗の土牢つ長谷観音 観光ふし強き矢倉の蚊に螫さる

スタンディングブツダと云はれ露けしや

饅頭に押す紅しかと国慶節

じゃんじゃらじゃん双十節の獅子現れぬ

中華獅子おどけ瞬きしたりけり

青龍の胴空を切る双十節

龍舞のくねり始めぬ秋天下

皿セザンヌ展に盛るリング崩るるところを描く

西洋梨ごろんと一つ静物画

とりすます陶器のポット秋日差

上野駅出て直ぐ共同募金のこゑ

上野の山人出の秋となりゐたり

赤い羽根つけて上野の森に入る

太陽神大英博物館 古代エジプト展ラーとミイラと昼鳴く虫

石像のテーベ市長と遭ふ秋昼

死者の書は畏多しと紙魚云うも

虫音のごと木乃伊の音声ガイド洩れ

身に沁みてナイルの青の石像護符

一室に木乃伊六體そぞろ寒

露\*カノポス壺はミイラにする際に肺胃などの臓器取り去つて入れる壺けさのここに極まるカノポス壺

空伝ひ町内運動会のこゑ

川上澄生

浜っ子の澄生のガス燈火恋し

眉唾黄表紙もの黄表紙七句ひろぐ秋燈下

黄表紙のうがち欠けたる世とくしやみ

「模聞もんがわ雅話」鬼の角切りうそ寒し

燈火親し「臍の下谷」を読み始む

秋はひねもす「鼻峯高慢男」読む

秋夜読む「扱さても化狐ばけたりきつね通人」

「他不知ひとしらず思染井おもいそめい」に深む秋

秋来るといふ目を鹿のしたりけり

林檎割りことしの蜜の多寡云へり

躍る身をあびせ倒して鱷墜ちぬ

赤ん坊をあづかる秋の空のもと

べつたら市べつたら市べつたら市と訪ひ行きぬ

もう一枚上からはおりべつたら市

べつたら市ひやっとする日続きけり

市初日べつたら漬の値踏みせり

もちこたふべつたら市の空模様

べつたら漬色白女将の腕ほど

角店に人のはりつくべつたら市

宮内庁御用のべつたら漬も売る

べつたら市麴てかてか粒立てり

あびせらるべつたら市の売口上

売ごゑの味見味見とべつたら市

家人よりけふよと云はれ後の月

榎の実のごろご道に辟易す

木犀の例へて云へば深情

一番の冷え込みありぬ蔦紅葉  
とつかかる自然薯掘りの一本目  
この山の自然薯あらかた抜かれしよ  
くしゃみして十一月に入りにけり  
セーター出すそんなきのふが過ぎてけふ  
鼻風邪の鼻にかかりし頼み事  
隼人瓜姿無類の冬に入る  
冬に入る顔決め込んで隼人瓜  
冬の蠅小さき翅を折り畳み  
顔洗ふ仕草幾たび冬の蠅  
着古しのセーターはおり古本市  
冬物の出し入れに妻余念なし  
もうそろそろなどと話して毛布のこと  
夜の寒し一枚多くはおり出づ  
高齢化社会社会と百舌啼けり  
十一月しよっぱなの風邪貰ひけり  
大櫓建長寺 扁額もみづる「天下禅林」に  
お風入れ慧可のぎよろ目に立ちすくむ  
お風入れ道隆さまの洗面具  
虫干しの開山語録と韓櫃と

\*白沢は中国で想像上の神獣。よく人語を解し有徳の王者の治世に出現。建長寺では風入  
れの守護神とする

白描の三つ目の白沢はくたくお風入れ

無準師範筆「菩提」

ぐぐぐいと引ける渴筆お風入れ

山芋の黄葉せる道のみけり

烏瓜からす天狗が好物の

建長興国禅寺破格の枯芭蕉

破れ着の大燈国師めく芭蕉

枯れ三昧一人愉しみ居る芭蕉  
全うの一語に尽きぬ枯芭蕉  
尻振りて玩具めく鴨近寄り来  
ほぐれ初む嵯峨菊蒼おひねりめく  
菊花展卒業式のごとくなり  
かかるのは手間のみ「如何菊作り」  
菊作り答えがでると勧めをり  
冬至芽の此処をと盆栽菊談義  
アンドロメダ星雲さながら懸崖菊は  
綿詰めがどうかうのと一文字菊  
煌々と厚物白菊スプーン弁  
晴れ舞台てふ菊苗の色を聞く  
何處となう畏き菊の前に立つ  
審査員何處見て菊の出来不出来  
堅物は菊にもありて塵寄せず  
望外の受賞と云はんばかりの菊  
要するに何處どう見ればよきや菊  
石路の花世間話をせることく  
三つ目で地下鉄を降り西の市  
真金町交番裏のお酉さま  
灯が点り枯木の間のお酉さま  
神鈴の三つは忙しお酉さま  
半月に風の納まる酉の市  
新旧の熊手高々行き交へる  
熊手の値耳打ちすれば「そりや無理だ」  
値のあって値の無き熊手よく売れる  
むにやむにやとやりて熊手に値のつきぬ

縁起物働き者の熊手だよ

熊手また売れたり火打ち石をちよい  
とつくりセーター人波をゆく酉の市  
熊手買ふ気つぶのよさが身上ぞ

射的屋の音の中抜けお酉さま

大熊手売れて手締めのよよいのよい

手締めには手締めの応酬一の酉

酉の市人の流れに蹴くばかり

お酉さま戻りの道の落葉風

ぶつ浅草 酉の市かられ躰くるりと酉の市

にぎにぎしく熊手鯛やら小判やら

熊手売手持ちぶさたの股火鉢

どれにせうずんと下がって熊手見る

派手好きの御代のきらきら熊手かな

もういっぽん先の道だよお酉さま

熊手持つ拳と拳行き交へり

新仲見世仲見世抜けて羽子板市

略服に済ますもよけれ七五三

極月のちよろちよろ動くおもちやかな

愛着の古着のやうな冬日差し

物価高の一年杉箸割り損ず

駅前の木のそこかしこ聖樹の灯

年内に片づけるもの抜書きす

町内に枯木と月と銭湯と

銭湯が未だあり大つごもり月夜

がちやちゃんと大つごもりのレジの音

数え日のもっさり顔が応対に



日本橋雪が舞ひ来てえらい降り  
みぞれるといふこゑありて霏れけり  
大衆魚真鱈の顔の冬親し  
日向ぼこ頭の抽出より挿話  
酒量落つ話さらりと年忘  
風体をとやかに云はれ破れ芭蕉  
鼻風邪の妻に味見を頼まれぬ  
注連飾り手つ取り早く済ませけり  
内祝ポインセチアを買うて来ぬ  
鴟が鴟にちよっかい出して遣り合へり  
逆上の鴟の癩癩玉破裂  
鼻風邪の妻の言づて事細か  
鼻風邪の寝付きよければ直るべし  
掛かりつけ大田医院の八つ手咲く  
タタツキルタタツキルぞと鴟啼ける  
ずぶ濡れの鴟の平氣の平左かな  
茸湯西川の名いちいち聞いて宿夕餉  
宿炬燵山の夜長を如何にせん  
朝日さす霜の空林空山に  
平茸を栗茸を指す箸の先  
山鳥の脂浮くなり茸汁  
木高手の葉降るお品嘉助の山墓に  
山宿の炬燵の酔ひがまはりけり  
濁り酒とろつと炬燵火は赫つと  
炬燵火をいっそう強くまたぎ宿  
木の実どき落葉どき過ぎ落人村  
道迷ふ朴の朽葉の幽界に

投函の小銭ひやつく共同湯  
共同湯屋根の落葉の分厚かり  
共同湯霜にこはばる身をほぐす  
編みシューズ落葉の匂ひ搔きたてて  
枯木風日に三便のバス待てり  
枯るゝ身に熱湯をこそ湯西川  
枯蔓に巻かれ混迷深める木  
拾ひ上ぐ紅葉の中の艶あで紅葉  
枯蔓の横暴極まりなき立木  
枯蔓の末路を晒す川つぷち  
枯蔓の幹に食い込む馬鹿力  
犬の踏む櫟落葉の音ぬくげ  
一つ木に集ふ烏と柿の数  
冬靄の和気あいあいの川景色  
せきれいの霜の色して岩畳  
上々に紅葉仕上がり龍王峡  
僕キツネ私タヌキの店師走  
息返子端山散策づける紅葉に急所あるごとし  
神業の柱状節理崖紅葉  
蝙蝠のやうに下りて枯るゝ葉あり  
ほうほうと云ひて拾へる朴落葉  
林道の細長落葉丸落葉  
爺じいさまの口許に似て隼人瓜  
裸木の光と蔭の部分かな  
がまづみの實やこの谿の鳥たちに  
がまづみを漁れる小鳥無我夢中  
落葉道どっこいここに走り根が

頭を掠め空林に入る冬の禽  
ユリの木の皆落葉して木偶の坊  
蠅螂の翅まだ青き十二月  
いろいろある種子の飛び方草の実展  
シクラメンぼかしてポートルート撮る  
髪刈って頭の頼りなき冬青空  
心臓の葉に加へ風邪薬  
浅草の師走に遊び牛鍋屋  
極月の火に煽られて中華鍋  
雷門脇の日向の師走猫  
青空に飛距離を申し散る木の葉  
街の木は枯れてタンゴの鼻濁音<sup>ダリエンソノ賛歌</sup>  
コントラバス靴底でとるリズム冴ゆ  
レーニン風唄い手の額灯に冴えて  
路上に舞ふ落葉とブエノスアイレスの雀  
ブエノスアイレス負け犬に吹く枯木風  
枯るゝ夜をジラジラと唄い出す  
口許が割れて洩れだす夜のタンゴ  
ジョーカーの裏でくすりと夜の笑ふ  
バイオリンずいこずいこと「颱風」ひく  
バンドネオンに翼枯木の宙を舞ふ  
痩せぼっちのキリストを吹く枯木風